

研究ノート

黎朝下ヴェトナム村落における漂散農民の分析(I)下

桜井 由 躬 雄*

A Study on the Peasant Drain during Lê Dynasty in Vietnam (I-2)

Yumio SAKURAI

The natural and war related calamities that caused the famines that forced peasants in North Vietnam to abandon their native villages from the fifteenth to the eighteenth centuries are analyzed through an examination of some Vietnamese chronicles and geographies.

1) During Lê dynasty there were many droughts from spring to early summer that led to large-scale famine. This illustrates that fifth-month rice production was important in North Vietnamese agriculture, especially in the highland areas beyond the Red River Delta.

2) One of the major causes of instability in rice production during Lê dynasty was the difficulty of maintaining stable yields in fifth-month rice cultivation which depended entirely on rain from the unpredictable Northeast Monsoon. Furthermore, the fifth-month rice cultivated in the highland areas was frequently damaged by locusts, especially in the fifteenth century.

3) Tenth-month rice cultivated in the delta area suffered damage from inundation by the Red River. In the early years of Lê dynasty, the flooding effected mainly the Hà Nội district and later, with the agricultural development of the lower delta, the Hu'ng-Yên district too was subject to flooding. However, except in the Thanh-Hoá delta, only a few of these floods led to famine.

4) The littoral zones of the Red River Delta were frequently damaged by high tides, mostly caused by typhoons. However, although such damage had increased with reclamation, it rarely caused large-scale famine.

5) Civil war produced famine in certain strategic areas such as Hải-Du'ong, Nghệ-An and Thanh-Hoá.

It appears that famines occurred mostly in the highland areas, the upper part of the middle delta provinces, and the Thanh-Hoá and Nghệ-An provinces during Lê dynasty.

However, a geography written at the beginning of the nineteenth century, shows that most of the ghost villages have *thôn* or *phủ'ong* as part of their name, indicating that they were probably established in the later part of Lê dynasty. From this it appears necessary to research into the socio-economic factor linking natural or war related in calamities to the peasants, abandonment of their native villages. This will be considered in part (2).

* 京都大学東南アジア研究センター

III 洪水の秋稲への影響

紅河デルタが過剰の水から農作を守るための膨大な努力によって開拓されたことは、すでに多くの識者の指摘するところであり、筆者もまたその歴史的発展については近く別に詳論する予定である。したがって、ここでは重複を避け、むしろその被害に重点をおいて考察してみたい。

その第1は、沿岸砂丘列地帯と東部のタイビンデルタを除く紅河デルタ一帯に影響を与える、紅河の洪水である。紅河の氾濫期は6月に始まって9月に終わる。これはほぼ雨季と並行している。⁹⁴⁾

1422年～1786年にかけて、ヴェトナムの3種の年代記は49回もの洪水が発生したことを記している。このうち、もっとも頻度のたかい1679年～1779年の100年間をみると、実に22例に達する。ほぼ4年半に1度、洪水が発生しているのである。しかしながら、夏稲の旱魃においては2年以上連続した例が13例計22年、全旱魃年の56年の4割近くを占めるのに対し、洪水の連続発生年はわずかに7例15年にすぎない。旱魃がきわめて不安定で夏稲に壊滅的打撃を与えたと推定されるのに対し、洪水は頻度こそほぼ同じでも、比較的規則的な、それだけにその被害の発生原因には人為的な面が多く含まれているとも考えられよう。

次に、洪水の発生分布を60年をスパンとして考えると、1420年～1479年の間に6回、1480年～1539年に8回、1540年～1599年に5回、1600年～1659年に6回、1660年～1719年に9回、1720年～1779年に15回と、1480年～1539年の洪徳治世から黎朝前期末にひとつのピークがあるほか、1660年代以降に漸増していることがわかる。⁹⁵⁾ この両代は共に別論するように、堤防の整備によるデルタの開拓が段階的な発展を遂げた時代でもある。洪水被害の頻度はいわばデルタ開拓の歴史に照応すると考えることもできよう。

また、洪水の発生を記載のあるものに限って月別に分類すると、次のようになる。

一 月	2	二 月	0	三 月	1	四 月	3
五 月	4	六 月	15	七 月	13	八 月	10
九 月	6	十 月	4	十一月	0	十二月	0

この表でみると、旧暦四月に始まり六月をピークとして十月に終止する。これはいわゆる秋稲の耕作期間と完全に一致する。秋稲が雨季の雨量に依拠する以上、両者の一致はいわば当然であるが、その発生頻度が時代を下るにつれて増大していることは秋稲栽培面積の拡大をも暗

94) P. Gourou, *Les Paysans du Delta Tonkinois*, pp. 74-77.

95) 洪水の発生年度を逐一あげると、次のとおりである。

1422, 1439, 1440, 1445, 1475, 1478, 1492, 1501, 1503, 1504, 1513, 1515, 1519, 1536, 1559, 1577, 1586, 1592, 1597, 1600, 1602, 1607, 1622, 1629, 1631, 1663, 1667, 1679, 1680, 1681, 1684, 1695, 1702, 1713, 1725, 1727, 1729, 1730, 1748, 1749, 1753, 1754, 1756, 1757, 1760, 1766, 1768, 1773, 1775.

示するものである。

次に、これら諸例のうち、明らかに農作物に影響があったと考えられる以下の27例について、これらの仮説が妥当するかどうかを考えてみよう。

①大越史記本紀実録2 太和3年(1445)十月

七日。洪水漲入城中，高三尺。禾穀淹損三分之一。

②越史通鑑綱目24 洪徳22年(1492)八月

大雨。辰，日夜大雨不止，水暴漲，敬天殿水深二尺二寸。青威⁹⁶⁾・青潭⁹⁷⁾等縣，平田水深四尺。命錦衣金吾二衛指揮校尉，分往疏決雨水之害禾穀者。⁹⁸⁾

③大越史記統編 正治2年(1559)八月

大水，没西都城，⁹⁹⁾淹倉庫，捐¹⁰⁰⁾禾穀。民饑，父安水溢，流数百家。

④大越史記統編 嘉泰5年(1577)

辰，清化累月霖雨，水潦傷稼，民大饑荒。

大越史記本紀統編2 同年

時，清華多淫雨，水潦七次，田禾多傷損。民大饑荒。

越史通鑑綱目29 同年

清華大水饑。是歲清花多淫雨，水潦風七次。田禾損傷，民大饑。

⑤大越史記本紀統編2 光興9年(1586)六月

二十五日。清華地方，天無風雨，忽馬江洪水漲溢，西都城没溺于水。江表逆流，湍急若射，木樹塞川，沿河之家，多流蕩于海。

同書 同年七月

二日。大水潦……。三十五日。又大水潦。一年之中，大潦風七次。

同書 同年九月

三日。大水，霖雨經旬。九日。又大水。十八日。雨止。是歲，清華地方，禾穀不登。

同書 同年十月

天又淫雨。經二旬不止。各縣諸山乱崩。

越史通鑑綱目29 同年九月

清花大水饑。先是安場宮¹⁰¹⁾中，暴風大作，斃屋拔樹，是月至十月。淫雨經旬，水潦風七次。

96) Thanh-oai (河内省 Hà Nội).

97) Thanh-tri (河内省 清池縣).

98) しかし同書によれば、この冬十月は大熟であった。したがって禾穀が害されたのはハノイ近傍のこの2縣に限られたとみられる。旱魃とちがって、地域的に小さく限られるのも洪水の特色であろう。

99) 西都城は越史通鑑綱目17 興慶元年条註によればタインホア省の永祿 Vinh-lộc 縣の春街 Xuân-nhai 芳街 Phu'ong-nhai 西街 Tây-nhai にあたる。大都城の遺跡の存在で有名である。

100) 捐は損の誤字であろう。

101) An-tru'ờng-doanh. タインホア省の瑞原 Thuy-nguyên 縣におかれた中宗、世宗の行宮。

清花不穀不登，民多饑殍。

⑥大越史記統編 光興15年（1592）七月
大水潦。清化・山西・山南，傷稼民饑。

大越史記本紀統編 2 同年同月

六日。洪水驟至，河水橫流丘陵漲溢。清華道禾穀不登。十五日。水又潦。西南之民亦荒飢。

⑦大越史記統編 光興20年（1597）

瀘江¹⁰²⁾ 水漲，田禾多損。

大越史記本紀統編 2 同年六月

是月，無風雨，瀘江水忽自漲溢，衝激。是歲，前大旱，後大水。田禾多損失，歲屢不登，民多流亡。

⑧大越史記統編 德隆 2 年（1629）六月

洪水大至。珥河¹⁰³⁾漲溢，衝入街衢南門外，水流漸，庸坊乘船人，行渡多溺沒。青池堤決禾損人飢。

大越史記本紀統編 3 同年同月

洪水大至。……又青池縣安沿勸良等社，及各堤路破潰，禾穀耗損，人民饑饉。

⑨大越史記本紀統編 3 盛德 5 年（1657）九月¹⁰⁴⁾

大風雨，拔木折屋，清華及山南下畔諸縣，人民陷沒，禾穀盡偃。

⑩大越史記統編 景治元年（1663）六月

大水泛溢，渰民田禾，浸民廬屋，快州常信地方，水害愈甚。

同書 同年十一月

鋤減四鎮民，季稅有差，恤水害也。

⑪大越史記統編 景治 5 年（1667）六月

清華處，河決水溢，渰浸民田。

⑫大越史記統編 永治 4 年（1679）

清華大水。堤路潰決，蝗虫傷稼，民多流散。冬十月。清華饑。

⑬越史通鑑綱目³⁴ 正和 5 年（1684）八月

大風水溢，珥河堤決。西北諸縣，田禾損失者多。

⑭大越史記統編 正和16年（1695）正月

王以清華水溢荒歉……。

102) 越史通鑑綱目30 同年条註に「瀘江在宣江省永綏縣西北，發源。至白鶴與洮江合。」とある。現在の Sông Chay。

103) Sông Nhi. 紅河のこと。

104) これは洪水を直接示唆する記事でないため，注95) からは省いている。

この大越史記続編を原史料とする越史通鑑綱目 同年同月条は「清花大水饑。」としている。しかし、旧暦正月（新暦では1695年2月13日～同年3月14日）に大水が発生した例はこのほかに正和23年の例があるだけで、仏領時代の気象統計をみてもこの季に大雨のある蓋然性はきわめて少ないと思われる。したがって、大越史記続編の同条は正月に大水に対する救済措置がなされたことを意味するものであって、必ずしも正月に大水が生じたことを示すものではない。むしろ正月に救済措置がなされたことは前年秋稲の収穫が損害をうけたことを示し、よって大水の発生時期は前年（正和15年）の十月以前と考えるべきであろう。

⑮越史通鑑綱目34 正和23年（1702）正月

清花大水。清花水溢，河決民饑。

これも、大越史記続編 同年同月条には「以清花穀歉，是至有河堤之役。」とあり、むしろ河堤を補修した時期として正月を指している。したがってやはり、大水民饑の発生は前年十月以前のこととするのが正しかろう。

⑯大越史記続編 永盛9年（1713）七月

霖雨不止，河水泛溢，山西山南清華十三縣堤防皆頽裂，流數萬家，人民饑饉。

⑰大越史記続編 保泰8年（1727）三月

減山南諸縣田租，以洪水渰損禾穀，命量隨損分数，減赦，從公沅之請也。

これも三月に大水発生とするのは奇妙であり、やはり前年夏・秋季の洪水に対する救済措置がこの月にだされたと考えるのが正しかろう。

⑱大越史記続編 保泰10年（1729）七月

大水。巨甕堤¹⁰⁵⁾決溢，没古碑行宮¹⁰⁶⁾城内，水深三尺。官居行坊，皆圯。¹⁰⁷⁾各處河堤潰決者衆。

同書 同年閏七月

命勸農官，分道往勘流民。

⑲大越史記続編 永慶2年（1730）四月

大水。漫厨洲堤¹⁰⁸⁾潰。先是，河堤築作二十四所。……至是，潰決甚衆，水勢泛溢。損失禾穀者，殆八九縣。

⑳越史通鑑綱目40 景興9年（1748）九月

大雨。河水溢，禾穀浸没。

㉑大越史記続編 景興14年（1753）十月

105) 巨甕堤。嘉林縣 Gia Lâm (北寧省) Cu'-linh 社。

106) 古碑行宮は嘉林縣 Gia Lâm の古碑社におかれた新府。

107) 壊であろう。

108) 越史通鑑綱目 同年条には「漫厨堤」とある。同書註によれば興安省 Hu'ng Yên 東安縣 Đông-an にあったという。

山南・京北・海陽暴風水潦，禾穀浸没。人民飢饉。

②大越史記統編 景興15年（1754）六月

河水溢。歩頭¹⁰⁹⁾・輞川¹¹⁰⁾堤決。民居田禾尽没。命憲司往勘，上其狀，議行極救。

③大越史記統編 景興17年（1756）十月

又安雨。水溢。田禾尽没。

④大越史記統編 景興18年（1757）七月

大水。

同書 同年十月

山西大饑疫，山西諸縣，大饑疫，民居僅存十之一二。

⑤大越史記統編 景興21年（1760）八月

霖雨。潦水渰没，田禾甚衆。

同書 同年九月

以清華久居苦水潦。……

越史通鑑綱目42 同年同月

清花大水。以清花民苦水潦。……

綱目では統編になかった「清花大水」の句をいれ、かわりに「久居」の句を削っている。したがって、果たしてこの年に大水がタインホア地方に起こったかどうかは疑問である。むしろ後述するように、タインホア地方には連年のごとく洪水があったとする記述として考えた方がよからう。

⑥大越史記統編 景興27年（1766）六月

霖雨。京北水溢河決。

越史通鑑綱目42 同年同月

霖雨。京北水溢，河決。京北諸縣河決。田廬浸没。……

⑦越史通鑑綱目44 景興34年（1773）七月

大水。東宅堤¹¹¹⁾潰。水決東宅堤，常信¹¹²⁾應天¹¹³⁾莅仁¹¹⁴⁾諸路流壞千餘家，禾穀浸没。

以上の例を発生年でみると、デルタ発展に比例して洪水被害数が増大するという、先の仮説がより明確になってくる。すなわち、15世紀にはわずかに2例、16世紀には5例にすぎなかつ

109) 越史通鑑綱目 同年条によれば、河内省 Hà Nội 上福縣 Thu'ò'ng-phúc にあったという。

110) 同じく山西省 So'n Tây 福寿 Phúc-thọ にあったという。

111) 越史通鑑綱目 同年条註によれば東宅堤 Đông-trạch は青池縣 Thanh-trì にあったという。

112) Thu'ò'ng-tìn 府，河内省。のちハドン省 Hà Đông。

113) U'ng-tiên 府。李朝時の呼称，ハドン省應和 U'ng-hòa 府のこと。

114) 利仁，里仁とも書く。ハナム省 Hà Nam の Lý Nhân 府のこと。

たものが、17世紀では7例、18世紀では実に13例にのぼるのである。

次に、以上の諸例のうち地域の記載のある23例について考える。まず、タインホアに起こった9例、1559年の西都城水没の記事をいれると10例が目につく。タインホアは莫氏に篡奪された黎朝が1546年から1593年まで行在をおいていた場所であり、1559年、1577年、1586年、1592年の洪水の記述がタインホアに集中するのはむしろこのゆえを考慮しなければならない。

しかしながら1577年、ついで1586年にも「水潦七次」とされるのは、まさにタインホアデルタの水利の不安定性を物語るものである。タインホアデルタの開拓史と気候との関係は別に詳論する予定であるが、その不安定性を示す例を幾つかあげれば、まず南西モンスーンおよび台風のもたらす降雨量の年々変動が、紅河デルタに比して著しく大きいことである。たとえば、1907年から1925年の間の降水量は最高が1907年の2778 mm に対し、最少は1133 mm であり、2.45倍に達する。これに対し、Phu-Lien のそれは1.91倍である。¹¹⁵⁾

また、デルタ面積が紅河デルタに比して著しく狭いにもかかわらず、マー川 Sông Mã、チュー川 Sông Chu の二大河川を有するため、洪水の被害は紅河デルタに較べると破壊的である。¹¹⁶⁾ たとえばチュー川は水量のもっとも少ない3月～4月で32 m³/sec の流量になり、9月、10月には5000 m³をこえるようである。一方、マー川は4月には80 m³ であるが、時には8000 m³ に達することがあるという。¹¹⁷⁾

さらにタインホアデルタは、6月から11月にかけてフィリピン東方海上に発生した台風の西進する、いわば通り道にあたる。この間の熱帯低気圧の進路図をみると、多くの曲線がちょうどタインホアの地点で交差し入り乱れている。¹¹⁸⁾ 大南一統志16 清化省気候において「七八月……或颶風大發」とあるのはこのことであろう。

タインホアデルタでは、人為的な水利網が一定して発達した仏領時代においてさえ、1903年、1904年、1909年、1910年、1911年、1917年、1920年、1921年には水害が発生し、特に1927年の9月21日の台風、10月8日の豪雨はタインホアの上流地帯にいたるまで大被害を及ぼしたという。¹¹⁹⁾ タインホア農業の地形的かつ気候的な不安定さを示しているといえよう。したがってタインホア地方においては紅河デルタ以上の人為的な水利施設の管理が必須の条件であるにもかかわらず、同地域はタインホア山地に遮ぎられて紅河デルタ中枢からは画然とした独立圏をなすため、唐代の諸反乱から黎利、黎朝後期の戦乱において常に中央権力に抗する割拠の地となっていた。16世紀後半および17世紀後半の戦乱期にこの地で集中的に水害の記事がみられる

115) Ch. Robequain, "Le Thanh-Hoá," p. 40.

116) *ibid.*, p. 48.

117) *ibid.*, pp. 309-311.

118) 中島暢太郎「東南アジアの気候の特性について(2)」p. 323.

119) Ch. Robequain, *op. cit.*, p. 316.

のも理解できよう。

次に、紅河がデルタ部に突入するソントアイ・ハノイ地区での被害の記事が注目をひく。これは1445年の城中（ハノイ）洪水、1492年のハノイ・タインオアイ・タインチャー、1592年のソントアイ、1597年のチャイ川、1629年のハノイ・タインチャー、1684年の紅河、1713年のソントアイ、1729年のザラム、1754年のハノイ付近、1773年のトゥオンタン・ウンホアと、全25例のうち9例にわたっており、タインホアの被害と相並ぶ。さらに、被害の記事こそみあたらないが越史通鑑綱目5 洪徳6年（1475）七月に「大水決、蘇歴堤」¹²⁰⁾とあり、また大越史記本紀実録6 洪順5年（1513）六月に「決安華坊堤」¹²¹⁾とあって、ハノイ近傍の堤防が頻りに決潰したことを示している。

P. Gourou も、急傾斜の高山のはざまをほぼ直線にくぐりぬけた紅河が、ヴィエチ¹²²⁾からフンイェンにかけてのいわゆる中部デルタで大量の排水と流速を維持し、たとえばメコンデルタの氾濫のような緩慢かつ規則的な氾濫形態とはまったく異なることを指摘している。¹²³⁾ 事実、北部ヴェトナムの文献に残る最古の築堤記録である大越史記全書3 龍符8年（1108）の「春二月、築堤機舎坊」（綱目編者の考えによれば河内省寿昌縣であるとされる。）¹²⁴⁾をみて、紅河、特にハノイ周辺のそれが歴朝の築堤工事の主たる関心事であったことがわかる。¹²⁵⁾ 最低の水位と最高のそれとが10 m 近くも移動するハノイ周辺の紅河の脅威から、ハノイ以南フンイェンにいたる輪中村落地帯を守るには、こうした不断の築堤作業が必要であった。それは逆に、フンイェン以南の下部デルタに比べ、中部デルタの農地は人為的に形成された側面がつよいことを意味する。1657年の山南下畔¹²⁶⁾を別にすれば、具体的な堤坊破壊記事の南限が1730年のフンイェン省ドンアン縣にとどまるのはこのゆえであろう。とすれば、同じ秋稻デルタ農耕地帯といっても、中部デルタと下部デルタはその生産の安定性において大きな差があったことになる。

しかしながら、タインホア・中部紅河デルタにおける洪水による被害の増大は、一見、生産力の減退、流民の発生に結びつくようであるが、上述の史料でみる限り、時代が下るとともにむしろ漸減している。民饑流散をもたらした洪水は16世紀にはタインホアを中心に5例あるが、17世紀では2例、18世紀では4例にすぎない。洪水発生との比率でみれば16世紀では2.4割、17世紀では1.5割、18世紀では2.2割である。特にハノイ周辺の紅河決潰によって民饑流

120) Tô Lịch 江。ハノイ市北方を流れる紅河の分流。

121) 越史通鑑綱目26 同年同月条註によれば、「安花坊。今安静坊。在河内懷徳府永順縣」とある。

122) Việt Trì.

123) P. Gourou, *op. cit.*, p. 76.

124) 越史通鑑綱目4 同年条註。

125) ハノイ・ソントアイ間の築堤作業については仏極東学院本「北圻河堤事跡」に詳しい。

126) 一見、山南下鎮の意にとれるが、越史通鑑綱目の同年条は「山南諸縣」として、特定を避けている。

散が生じたのは、1597年、1629年の2例、仮に1729年七月と閏七月の記事が相関するものとしても3例にすぎない。したがって戦乱、旱魃など他の複合的な要素が加わるタインホアを別として、中部デルタの農耕においては高地部の旱魃の被害に較べれば、むしろ比較的安定した経営をとりえたとすることができよう。これは後述する流民村落の地域的な分布をみるときに、さらに明確な形となってあらわれる。

IV 津波の秋稲への被害

最近、日本においてはヴェトナム史における農業水利を語る際に、洪水に対する農民の自衛機構、いわゆる中部デルタ (Moyen Delta) における輪中村落の意味を強調しすぎるあまり、デルタ生産力の大宗をにぎる下部デルタ沿岸諸省の問題を等閑視する傾向がみられる。¹²⁷⁾ たとえば仏領時代の史料によれば、北部全水田面積のうち30.9%はケンアン、タイビン、ナムディン、ニンビンの沿岸4省によって占められ、さらに生産力のたかい二期作田に限れば53.6%に達するのである。前述のように、これら沿岸諸省の村落の大部分は P. Gourou の用語にしたがえば「沿岸砂丘列村落」 (les villages de cordons littoraux) によって構成される。この村落の形成過程については別論に委ねるとして、これらの村落の最大の脅威は河川の洪水よりも「台風による風津波」 (marée de typhons) を原因とする冠水の被害である。¹²⁸⁾ 各種年代記においても、おそらくこの風津波と思われる記述が以下のとおり4例みられる。

①大越史記本紀実録3 光順8年(1467)九月

二十日。颶風。南策¹²⁹⁾・峽山¹³⁰⁾・太平¹³¹⁾・建昌¹³²⁾海瀕等府、海水大漲、堤防決裂、禾穀浸淹、瀕海之民多饑死。父安、源頭海瀕等亦被水害。

同書 同年十二月

免瀕海軍人明年大集。以八九月間、颶風大作、海水漲溢、瀕海民屋房、漂没故也。

②越史通鑑綱目27 元和4年(1536)四月

大風水溢。大風折木發屋、海水漲溢、人畜多溺死。

③大越史記統編 弘定18年(1617)九月

颶風。海水溢。

大越史記本紀統編3 同年同月

時五熟當熟、颶風大起、鹹水破潰。近海之民、多被其害。

127) たとえば、齊藤玄 1970. 「ベトナムの民族精神の形成について」『シェノー・ベトナム民族形成史』理論社、pp. 280-286.

128) P. Gourou, *op. cit.*, p. 80.

129) Nam-sách 府、ハイゾン省。

130) Hiệp-so'n 縣、ハイゾン省。

131) Thái-bình 府、タイビン省。

132) Kiên-xu'ong 府、タイビン省。

④大越史記続編 景興37年（1776）正月

赦山南海陽安廣¹³³⁾沿海之民，今年田租有差。去秋颶風大作，海水漲没田穀，憲司以狀聞，故有是命。

しかしこのようにおそらく台風による風津波を原因とすると思われる被害は，わずかに4例にすぎず，しかもこれが饑饉を生じさせたのはただ1467年の1例だけである。後述するように朝廷の対策も，他の旱魃，洪水には種々の方途を講じているにもかかわらず，この瀕海部の水害に対しては，わずかに兵役の緩免（1467），田租の免除（1776）の2例があるにすぎない。いわんやこれによる流民の発生を示す記載はまったくみられない。これは黎朝時代における瀕海部下部デルタの開拓がほとんど進んでいなかったことを暗示するものであろう。別論で詳述するように，景興35年（1774）三月に山南鎮定の范輝錠，陪従の阮貴惇らによって山南（南半はナムディン，タイビン）の沿海部の無登録田を調査し堤防を築き開拓民をつのっているが，実にこの翌年に150年ぶりの高潮被害が発生していることは，この間における下部デルタ開拓の進捗と高潮被害の発生との相関を示す象徴的な事件といえよう。

V 蝗害による被害

紅河デルタにおいて蝗害は大きな問題ではない。いわゆる東アジアの蝗害は飛蝗（*Locusta migratoria*）によってもたらされることが多いが，紅河デルタは中部とちがって，この飛蝗の被害から一種の「退避地」となっている。¹³⁴⁾ R. Dumont の記述からみる限りでは，通常の飛蝗はその産卵のために乾いた土地を必要とする。紅河デルタに飛蝗が襲来するのはわずかに日照りの年だけであるという。したがって紅河デルタにおいて害をなす直翅類は *Oxya Velox* といわれる種類だけであると記述されている。これは通常，葉や茎の上に産卵し生長する。しかし，各種年代記でみる限り，北部を襲った蝗害は必ずしもデルタに生息する *Oxya Velox* ばかりだとはいきれない点がある。蝗害の発生した年代は以下にみるとおりである。

①大越史記本紀実録2 紹平元年（1434）十月

蝗傷稼，差官分道驗田穀。

②大越史記本紀実録2 紹平2年（1435）四月

旨揮諸路縣社官等，見有蝗虫発生，嚙害桑苗，即令禳祓，以除民害。

同書 同年八月

蝗害稼。

③大越史記本紀実録2 紹平4年（1437）六月

133) 安廣承宣。廣安省。ハイニン・クエンイェン両省にあたる。

134) R. Dumont, *La Culture du Riz dans le Delta du Tonkin*, p. 409.

旱。虫復傷稼，令諸路鎮，祈雨。……

辛未。詔曰，近歲以來，旱蝗相仍，災疹荐至。

④大越史記本紀実録2 紹平5年(1438)五月

二十七日。以災異下詔曰，比歲以來，旱蝗相仍，災異荐至。

⑤大越史記本紀実録2 太和6年(1448)六月，七月

本論I(2) 旱魃による夏稲の損害(前号)中，①同書 同年の記述参照。

同書 同年七月

蝗。

⑥大越史記本紀実録2 太和9年(1451)四月

以災異下詔曰，比歲以來，旱蝗相仍，災疹荐至。

⑦大越史記本紀実録3 光順8年(1467)九月

小熟。蝗。

越史通鑑綱目20 同年九月

蝗。辰蝗蟲爲災，命道士設壇祈禱。又命阮如堵等，致祭諸祭神，以禳之。

同書 同年十一月

北城¹³⁵⁾蝗。

⑧大越史記本紀実録6 光紹7年(1522)十月

天雨蝗虫。

⑨越史通鑑綱目27 光紹8年(1523)八月¹³⁶⁾

蝗。

⑩大越史記本紀実録6 莫大正元年(1530)三月

大旱。蝗虫。禾穀枯死。

⑪大越史記本紀続編3 弘定18年(1617)九月

山西處大蝗。

⑫大越史記続編 永治4年(1679)

清華大水，堤路潰決，蝗虫傷稼，民多流散。

⑬越史通鑑綱目36 保泰4年(1723)十月

蝗。

⑭越史通鑑綱目42 景興20年(1759)九月

蝗。諸路有蝗。令三司官，設壇禳之。

⑮大越史記続編 景興46年(1785)十二月

135) 北部の呼称。

136) 大越史記本紀実録6 統元2年(光紹8年と同年)条に同一の記述あり。

蝗。天下饑饉。

蝗害は発生例が少ないため、その影響の如何にかかわらず全例を収録してみた。この結果、第1に、全15例のうちの7例までが15世紀に集中し、しかもこのうち6例までが農作物に甚大な影響を与えたと考えられるのに対して、16世紀の蝗害は3例、17世紀2例、18世紀3例と異常に少なく、かつ農作物に被害を与えた例は16世紀以降ではわずかに4例にしかすぎないことがわかる。これは蝗害の発生が年代的にきわめて限定されていることを示している。

第2に、多くの蝗害は旱魃と同時期に発生している。1434年はこの年四月から五月にかけて宣光、清化などの地方に旱魃が発生している。¹³⁷⁾ 1437年は本文中に旱が示されるのみならず、三月、四月にも「旱」「祈雨」「禱雨」の字句がみられ、「六月庚午京師雨」とある点からも、三月から六月にかけて旱魃が続いたことがわかる。1438年、1448年、1451年は本文中に旱の字句があり、1467年は本論旱魃の項の②（前号）に示したように1466年秋より67年2月まで旱魃が続いていた。1530年も同⑤に示したとおり六月下旬まで旱が続き、1759年は同⑦に示したように、大越史記続編によれば四月、綱目によれば六月に大旱があった。したがって、全15例のうち9例は旱魃年と同年に発生しており、特に15世紀以前では7例のうち6例が旱魃をともなっている。とりわけ1437年、1438年、1448年、1451年では「旱蝗」「旱蝗相仍」とあって、旱と蝗の組合せがフレーズ化して用いられている。

R. Dumont は前述のように飛蝗が紅河デルタに襲来するのは旱魃の年であるとしているが、とすれば年代記中、特に15世紀以前に問題となっている蝗害は *Oxya Velox* ではなく、*Locusta migratoria* であった可能性がきわめてつよい。先に、旱魃の発生月および頻度から黎朝ヴェトナムの生産力においては高地デルタの夏稲のシェアが相対的にたかかったと推測したが、この蝗害が15世紀以前、特に聖宗年間（1460年～1497年）に集中していることは、この時代に高地型の、飛蝗の被害に弱い体質の米作が依然としてかなりの比重を示していたもうひとつの証明となろう。旱害の被害を倍加するであろう蝗害は、黎朝、特に前期の高地デルタ部の生産の大きな不安定要因であったろうことは容易に想像されうる。

VI 軍事的要因による饑饉の発生

このように旱魃を始めとするきわめて不安定な状況の中で開拓が進められた紅河、ティンホアデルタの農民に、一時的かつ地方的な現象とはいえ壊滅的なダメージを与えたのは、16世紀以降群発する内乱による農地の荒廃であった。よく知られるように、この時期の内乱は、黎朝前期末の1590年の襄翼帝によるクーデターに始まり1527年の莫登庸の即位に終わる第1期、1533年の荘宗の即位に始まり1593年の鄭松による昇龍城（ハノイ）の回復にいたる第2期、以

137) 大越史記本紀実録2 同年四月、五月条。

後、高平¹³⁸⁾ 諒山¹³⁹⁾ 地帯に拠る莫氏、順化¹⁴⁰⁾ 地方に拠る阮氏、そして北部デルタから清化・父安を支配する黎二鄭氏の鼎立を中心とする1672年までの第3期、1737年の阮當興の反乱に始まり黎維密、西山と連なって1788年の黎朝の滅亡にまでいたる第4期にわけることができる。

次に、各期ごとの戦乱によって惹起された饑饉の形状について考える。

第1期

①大越史記本紀実録6 光紹2年(1517)

是歳天下大飢。人民餓殍相枕。海陽・東潮¹⁴¹⁾・峽山・京北・安豊¹⁴²⁾・僊遊¹⁴³⁾・東岸¹⁴⁴⁾ 諸經兵處尤甚。

これはおそらく洪順8年三月同省の水棠縣¹⁴⁵⁾に起こり、北寧省(京北)・僊遊・桂楊¹⁴⁶⁾・嘉林に迫った陳高の乱を指すのであろう。この乱は鄭惟懌による襄翼帝の弑逆、さらに阮弘祐による京城の焼討、陳高の入城をよび、鄭惟懌による同年八月の京城回復まで、ほぼ天徳江(仏名 Canal des Rapides)の北岸諸縣一帯を戦場とした。時季のおよび地域的にみて、夏稲の開花、結実期に損害を与えたと考えられる。第1期における戦火の罹災の記述はこの1例のみである。これは年代記中の数多い戦乱に比して一見奇異であるが、逆にいえば他の第1期の諸戦闘が宮廷内乱に類した小規模のものであったことを示している。

第2期

②大越史記本紀続編1 元和15年(1548)

海陽之民、頻罹兵火、多至流亡。

これは海陽省安陽縣出身で莫氏の将であった范子儀が起こした反乱の結果である。范子儀は当初、山南承宣の御天縣¹⁴⁷⁾に拠り、ついで安廣地方をぬけて中国南部に逃げこんだ。海陽は興安より海潮江(仏名 Canal des Bambous)にぬける通過路にあたる。

③大越史記本紀続編1 正治4年(1561)三月

(莫)潜遣莫敬典、領兵寇掠清華、至各海門、……於是、賊勢憑陵、民多流散。

1546年以来、阮淦、鄭検の擁する黎帝(莊宗・中宗)はタインホアの萬頼册¹⁴⁸⁾に拠って、ハノイの莫氏と対峙したが、この間1593年にいたる両軍の基本的な戦闘は、陸路北上してニンビ

138) Cao Bằng 省。

139) Lạng Sơn 省。

140) Huế.

141) Đông-triều 縣, ハイゾン省。

142) Yên-phong 府, バクニン省。

143) Tiên Du 縣, バクニン省。

144) Đông-ngân 縣, バクニン省。

145) Thủy-đầu-ông 縣, ハイゾン省。

146) Quốc-du'ông 縣, バクニン省。

147) のちの興仁縣 Hưng-nhân, フンイエン省。

148) Thụy Nguyên 縣, タインホア省。

ン方面からデルタ中央に進出する鄭軍と、海路ティンホア・ゲアン方面に上陸して行在の萬頼冊をねらう莫軍との間で行なわれた。莫軍は1555年、1557年、1561年、1565年、1570年、1571年、1574年、1575年、1576年、1577年、1578年、1579年、1581年、1583年と、ほぼ29年間に14回にわたって、ティンホア・ゲアンへの侵寇をはかった。このうち1561年は、特に主力がニンビン方面にあったため黎軍は行在が陥落するまで頽勢にあった時であり、この年九月まで戦闘が続いている。

④大越史記本紀続編 7 正治13年（1570）八月

二十五日。莫大挙兵，各道並進。馬江自甕關以下，藍江自俸律以下，煙火障天，旌旗蔽日。清華人民，携老扶幼，奔走道途，不知依。號泣盈天，其財畜婦女，盡陷于莫。……時清華各縣，人民散亡，田無耕種，多荒餓焉。

この時、莫の兵は20万余、戦船 700 余艘と伝えられるが、その数の是非はともかく、15世紀においてわずか社数 638¹⁴⁹⁾ にすぎないティンホア地方に膨大な兵力が注入されたことは誤りない。甕關はマー川の上流、廣化府錦水縣古隴総であるという。¹⁵⁰⁾ 錦水縣¹⁵¹⁾ はマー川河口より 90 km、ほぼ海拔 100 m の地点にある。狭小なティンホアデルタは完全に戦火に覆われたと考えてよからう。同書 正治14年（1571）は、

令清華各縣社，經兵漂散者，許回本貫，復業安居。
としている。

⑤大越史記本紀続編 7 正治14年（1571）

是年，父安各縣，田野荒蕪，一穀不收。民大饑餓。更被瘟疫，死者過半。人多流亡，或散之南方，或漂居東北。

この年七月、莫敬典は兵をかえして父安を攻め、九月になるまでこの地にあった。この記述は饑餓発生理由を示していないが、おそらく前後の状況からこの戦乱による饑饉と考えるのが正しかろう。ちなみに越史通鑑綱目28 同年十月条も理由をあげずに「清花大饑」としているが、これはやはり、正治13年、14年と続いたティンホア一帯の戦乱と関係していると考えべきだろう。

⑥大越史記続編 光興17年（1594）七月

莫敬章與偽太國，寇掠青河¹⁵²⁾四岐¹⁵³⁾諸縣。永頼土將頼郡公反，偽称莅國公從之劫掠。海陽

149) 拙稿「ヴェトナム中世社数の研究」p. 29, p. 38.

150) 越史通鑑綱目28 正治13年条註。

151) Cẩm-thủy 縣，ティンホア省。

152) Thanh-hà 縣，ハイズオン省。

153) Tú'-kỳ 縣，ハイズオン省。

之民，不得耕植，大饑荒，人相食。

光興16年（1593）春，ハノイが黎軍の手に落ちて、1596年にかけて莫氏の余党が天徳江の北部一帯に拠り、小戦闘が続いた。莫の壮王であった莫敬章もその一人で、1596年に安廣に移動するまで海陽諸縣を占拠し、鄭氏またはフエから北上した阮潢と争い合った。

大越史記本紀続編2 同年十二月

時太原諸縣，猶爲偽威王莫敬用等所占，諒山猶爲莫敬泰・莫敬寛等所據，所在劫掠。地方人民大半不得歸農，田野荒廢。

第3期

第3期の戦場は主として乂安以南，廣平¹⁵⁴⁾ 地方を中心としたため，北部デルタには基本的に影響はなかったとみえ，戦乱による饑饉の発生は伝えられない。

第4期

⑦大越史記続編 景興2年（1741）八月

大饑。發官粟分賑流民。永佑末，盜賊並起，民廢農業，海陽尤甚。惟山南差安。流民扶携，就食者塞路。米價騰貴，百錢不易一飽。民多仰食菜茹，至有灸蛇鼠以度日者，餓殍相望。海陽號稱稠邑。至是有僅存三戸五者。

永佑末の戦乱とは永佑5年（1739）十二月に海陽省の至靈縣¹⁵⁵⁾ 寧舎社の阮選，阮蓮を始めとして，各地に発生した反鄭反乱を指すのであろう。この諸反乱は景興2年（1741）七月阮蓮らが捕えられるまで，ハイゾン・ナムディン一帯を戦場とした。ハイゾンの被害は引用文にあるとおり，もっとも深刻であったが，次の史料によれば，デルタ一帯が多大の被害をうけたことがわかる。

越史通鑑綱目38 同年十月

遣參從阮貴慙・武公宰為諸路招撫使。貴慙等分行諸路，勸農桑，招流亡，募田作墾，撫糾盜劫。辰村邑彫散，其最甚者一千七百三十。次者一千九百六十一。

この戦乱の影響がデルタのどこまでに及んでいたかを画定することは不可能であるが，仮にこれをゲアン以北の全北部と考えると，村落総数（19世紀初めの各鎮総社名備覧による。一後述一）8098社2519村のうち，約3700社村に流亡が起こっていたことになる。たとえば海陽はこの時，戦火による疲弊のために諸税を免除されるが，次に課税が復活するのは8年を経た景興10年（1749）である。もってこの永佑の兵興の巨大な破壊力を知ることができよう。

⑧越史通鑑綱目41 景興13年（1752）正月

154) Quảng Bình 省。

155) Chi-linh 縣。

遣武公鎮・杜輝琪等，招撫西南諸路。辰兵興所在彫弊。彰德¹⁵⁶⁾・美良・安山¹⁵⁷⁾・石室¹⁵⁸⁾諸縣漂散尤甚。乃遣使分往安集之。

彰德縣美良縣は山南上鎮，安山縣石室縣は山西鎮に属する。共にデルタ西方，紅河がダイ河に分岐する近くにある。1743年，海陽に起こった阮有求の乱は1745年ごろから山南，山西方面にうつり，1750年には山西の阮永芳が厥起し，翌51年にかけて山西・山南北部は戦火につつまれた。年代記の上では景興12年（1751）正月，阮有求が父安で捕われ，二月阮名芳が山西鎮と太原鎮の境で捕われてから，山西一帯は鎮静化されたことになっているが，この記事と翌景興14年の屯田例からみる限り，この時以後長期にわたって流散がやまなかったことがうかがわれる。

⑨大越史記統編 景興14年（1753）三月

命定采訪父安彫民，議屯田。先是東南經兵火，田野多荒廢。命所在屯田開墾，是至議攻討，外兵更代及諸路耕作，貯粟實邊。

すでに述べたように，景興13年には父安地方に戦乱の記載はなく，わずかに景興12年正月，ハノイ近傍の戦いに破れた阮有求が父安の阮筵を頼って落ちのび，父安南塘縣¹⁵⁹⁾にたてこもり政府軍に破れて捕われた記事があるのみである。しかし，本文に「東南經兵火」とあるところからみると，年代記ではさして大きな扱いをうけない阮筵の勢力，あるいは山西の勢力が，父安にまでおよぶ影響を与えていたのであろうか。

⑩大越史記統編 景興30年（1769）正月

錫興化今年稅，段阮倭，以猛天崗甫平，陳區処十餘事。大畧言，州民經亂之後，人口凋耗，青儂山族，多被轉徙，藩州無約束，從牢附漢，靡有所止，請議寬恤。更定條制，使十州永為編戶，命悉行之。

これは，景興28年（1767）以降，興化を中心にして活発化した黄文質の乱による流散であろう。なお年代記にみる中越辺境地区の流散はこれのみであるが，中国側の記録によれば，ヴェトナム側の内乱によって，流民が中国側に越境した事例は永佑初年から15年間にわたって種々みられるという。¹⁶⁰⁾

以上の諸例をみると，ほぼ16世紀後半と18世紀後半に集中して，デルター帯がパニック状況に陥っていたことがわかる。しかし，戦乱がその原因である限り，そして軍隊通過時における掠奪が窮乏の直接的原因である限り，このパニックもまた，戦略的に重要な地方にのみ集中的

156) Chu'ong-đúc と Mỹ-luong は統合してハドン省の Chu'ong-mỹ 縣となった。

157) Yên-so'n 縣，トゥエンクエン省。

158) Thạch-thật 縣，ソントイ省。

159) Nam-đu'ò'ng 縣，ゲアン省。

160) 鈴木中世 1976.「黎朝後期の清との関係」『ベトナム中国関係史』山川出版社，pp. 418-422.

に発生したことは容易に想像しうる。事実、全10例のうちハイゾン地方は4例、タインホア・ゲアン地方も4例を数える。下部デルタの山南下鎮（ナムディン・タイビンなど）を襲った戦乱は1例もない。したがって、永佑末の大乱によって海陽を中心として大饑饉が発生した景興2年（1741）に、戦乱から隔離された山南と父安ではむしろ豊作だったという事態も生じた。大越史記続編 景興2年には、

命糶粟于父安・山南。自兵興以來、天下饑饉。惟二處稍稔。富民多積粟，命父安糶粟二百萬，山南糶百五十萬，每五十萬鉢，價錢一絹，父安市價較平，山南市價，每絹十五鉢，官價蓋抑買也。

とあって、官が父安および山南の粟を公定で大量に買い入れたことがわかる。この時、のち大官となって権勢をふるう阮有整の父阮敏は、穀をはらった米を納入し、かわりに納入額を減してもらって一代で財をつかんだといわれる。¹⁶¹⁾ これらの粟米は、大越史記続編 同年条に、

発山南糶粟十萬，賑海陽饑民。

また、

夏四月，発官米煮粥，賑給東北饑民。

八月，大饑。発官粟分賑流民。

とあるように、年代記上はもっぱら海陽方面の流民の対策として用いられた。これは、戦乱がその多頻度にもかかわらずその被害が地域的限定をともなっていたことを示している。

小 結

以上述べたところをここで簡単にまとめてみる。（1）黎朝時代では旱魃による夏稲の不作が頻繁に起こり、これが飢饉の主たる原因となっている。これは当時の夏稲栽培が高地デルタにおいては相当広範囲に行なわれていたことを示している。18世紀以降、紅河デルタ、タインホアデルタに発生する旱魃は、デルタに夏稲が導入されたあらわれとみることができる。一方、同世紀におけるゲアンの旱魃は、デルタとは逆に高地型夏稲の栽培による開拓が進捗したためと考えられる。（2）しかし夏稲栽培は全面的に東北モンスーンのもたらす不規則な雨量に依拠するためと、特に高地型の夏稲栽培においては飛蝗の襲来のために、その生産は常に不安定である。（3）一方、デルタにおける秋稲栽培は洪水による被害をうける。これは当初紅河に沿ったハノイ周辺の中部デルタを集中的に襲うが、下部デルタの発展と共にしだいに拡大する傾向がある。しかし、その多くはタインホアデルタを除いて大饑饉の発生にはいたっていない。（4）瀕海部デルタは台風による高潮の被害をうけるが、これも瀕海部砂丘列村落の発展と共に拡大する傾向がみられる。しかし同様にして大饑饉に直結する例は少ない。（5）16世

161) 大越史記続編 同年条。

紀以降の各戦乱による農耕の被害は数多くあるが、その土地の戦略的重要性が大きく関与するため、ハイゾン・ゲアン・タインホアなど地域的に限定されて発生する。

したがって、饑饉の発生を地域的に考えれば、①高地型の夏稲栽培地域であったと考えられる扇状地型地形の諸省、黎朝の行政区画でいえば、安廣（広安）・海陽北部・諒山・高平・京北（北寧）北部・太原・宣光・興化・父安の各承宣、②中部デルタ上方の山西・山南上鎮・京北南部など紅河溢水の直接的被害をうける地域、およびマー川の被害をうける清化、③戦略的に重要である清化・海陽・父安などに被害が集中し、デルタ生産力の大部分を占める山南下鎮などの下部デルタは比較的安定的であったと考えることができる。

19世紀初めに各村落の名称を集めてつくられた各鎮総社名備覧¹⁶²⁾には、たとえば海陽鎮では「一縣後簿各縣社漂流未復回參拾伍社村坊寨庸」として、丁卯年（嘉隆6年、1807）に登籍がなかった村落の名を各鎮ごとに列挙してある。表1はこれを村落名称ごとに整理したものである。一見してわかるように、漂散村落248は13承宣のうち、海陽・父安・清化・山南上鎮・京北に発生しているが、山南下鎮にはまったくみられない。

表1 漂散村落表

	社	村	坊	庸	寨	庄	筈	渡	崗	廊	冊	郷	案	所	計
海陽	唐安			2											2
	唐豪			1											1
	錦江		1		2										3
	嘉祿			1											1
	青沔	3													3
	金城			3											3
	東潮	5		2		3									10
	安老		2												2
	安陽	1		1											2
	至靈	1	1	6											8
計		10	4	16	2	3									35
太原	司農	3													3
	洞喜	5													5
	大慈					1									1
	平泉	2													2
	武崖	1													1
	富良	4													4
	定化				1(村?)										1
計		15			1	1									17

162) これについては次の論文中に紹介されている。山本達郎 1943.「安南の地誌について」『同慶御覧地輿誌図』東京：東洋文庫，pp. 7-9.

		社	村	坊	痛	寨	庄	筈	渡	崗	廊	冊	郷	案	所	計
安廣	安廣			1												1
	先安			2												2
	萬寧			2												2
	計			5												5
宣光	褐安	7						1	2							10
	大蛮				2				1							3
	別	10				7					1	2				20
	計	17			2	7		1	3		1	2				33
諒山	溫州	2														2
	脱朗	1														1
	文開	5														5
	文淵	5				1										6
	七泉	2														2
	禄平							2								2
	安博	3														3
	計	18				1	2									21
父安	奇華	3					1									4
	天禄	3	2													5
	興元	4	2													6
	計	10	4				1									15
清花	弘化		5													5
	瑞原	1	12				2					3	1	1		20
	計	1	17				2					3	1	1		25
山南上	富川		2			1										3
	彰德		1													1
	天施		3													3
	芙蓉	1														1
	金洞				2											2
	東安	4														4
	青廉	2														2
	維先	1														1
	金榜	5			1										1	7
	南昌	11		3												14
	計	24	6	6		1									1	38
京北	文江	1														1
	良才	10	3													13
	嘉定	2														2
	東岸	2														2
	桂陽	7														7

桜井：黎朝下ヴェトナム村落における漂散農民の分析（Ⅰ）下

	社	村	坊	庸	寨	庄	筈	渡	崗	廊	冊	郷	案	所	計
仙遊	3														3
武江	4														4
安豊	1	1													2
金華	1														1
安越	1														1
陸岸	3														3
保禄	2														2
安世	2		1												3
鳳岸	3	1	1												5
右隴	3				1										4
計	45	5	2		1										53
総計	140	36	29	5	13	6	1	3	1	2	3	1	1	1	242

次に1807年段階の全社数に対する流散社数の百分率を以下に求めた。

海陽	0.73	太原	4.39	安廣	0.00	宣光	7.36
諒山	8.57	乂安	2.11	清化	0.16	山南上	2.85
京北	4.21						

この数値から、宣光・諒山の2鎮はきわだって社数の流散比がたかく、太原・京北がこれに次いでいることがわかる。これは完全にデルタを囲繞する扇状地型の農耕分布と一致し、この地の農業がいかに不安定であったかを明確に示している。先の年代記よりみた地域的な饑饉の分布を一定に裏付けるものといえよう。

しかし表1はさらに重大な事実を知らせる。本表から各鎮の流散村落中に占める社数と、それ以外の村落との比率を百分率になおしたものが以下である。

	社	社以外の村落
海陽	28.6	71.4
太原	88.2	11.7
安廣	0.0	100.0
宣光	51.5	48.5
諒山	85.7	14.3
乂安	66.7	33.3
清化	4.0	96.0
山南上	63.2	36.8
京北	84.9	15.1

これをみると、安廣・清化・海陽の3鎮では圧倒的に社以外の村落の流散が多く、たとえば安廣・海陽では坊名をもつ村落、清化では村名の村落が流散している。

坊 Phu'o'ng という村落がいかなる存在であるか、筆者自身は水機坊という坊名がきわめて

多いこと、またデルタ東部ではほぼ1総¹⁶³⁾に1坊がおかれていることから、総の水利に係る人為的な村落と考えているが、いまだ推測の域をでない。ここでは18世紀以来デルタ東部に急増した新村落とのみ理解したい。さて各鎮総社名備覧の海陽鎮で1807年段階まだ残存している坊は12坊のみ、しかも唐豪縣(2坊)金城縣(5坊)宜陽縣(5坊)の3縣に分布しているにすぎない。したがって唐豪縣は3分の1の坊、金城縣では8分の3の坊が流散し、宜陽縣を除く他の諸縣では全坊が流散したことを意味する。これは同鎮の1807年段階の社数1373に対してわずか10社が流散したのに比べ、異常にたかい数値である。何らかの原因による生産の低下がこれらの新村落に特にダメージを与えたとしか考えられない。安廣鎮もほぼ同様な状況で残存した坊数11坊に対し、流散坊は5坊に達する。101社がまったく流散を示していないのに対し、同じく異常な減少である。¹⁶⁴⁾

清化では弘化、瑞原の2縣にしか流散が起こっていない。しかし弘化では130村に対して5村が流散しているのに比べ、70社はそのまま流散を生じていない。瑞原では49村に対して12村が流散しているが、36社に対してはわずかに1社である。デルタ東部において坊のうけた被害には及ばないにしても、流散が「村」を集中的に襲ったのは事実である。比率こそ逆転しているが、父安における4村の流散もほぼこれと同じ状況であろう。清化・父安・東部デルタのような黎朝期に新村建設が活発に行なわれた地域では、まずこうした開拓村が破滅したとみることができよう。

これはわれわれに新たな問題を提示する。すなわち自然的条件または戦乱という外的な要素に依拠する農業生産の不安定性は、たしかに数年を周期とした飢饉の発生として年代記上にあらわれる。しかしその飢饉が生産生活の崩壊、農民の生産放棄、流民化という社会現象につながるために、何らかの社会的条件の存在が示唆されるのである。それがいまだ封建体制下にあっては権力による剰余価値搾取の態様を意味することはいうまでもない。以下続論においては、こうした飢饉に対する権力側の対応を分析することによって、生産農民の流民化の過程をさぐり、あわせてこれら流民が権力によってどのように再吸収されていくか、あるいはその枠を超克することによってどのように反権力的な存在に発展していったかを考えてみたい。

終りに小論はその発想の多くを京都大学東南アジア研究センター地形学の高谷好一教授、同じく気象学の安成哲三氏とのほとんど連日のディスカッションに拠るところがきわめて大きい。第Ⅰ部の末尾を借りて両氏に深く感謝したい。

163) 阮朝期に数村を集めてつくられた行政体。ヴェトナム名 *tổng*, フランス名 *canton*.

164) この間の村落数統計は拙稿「前掲論文」pp. 38-46による。